

# 146

2024 AUTUMN

## 美術館NEWS



収蔵品の紹介 Vol. 17

兼行誠吾《象》(部分)  
平成29(2017)年  
陶器・手びねり  
23 × 41 × 36 cm

# 世界遺産 大シルクロード展

森田 詩織(学芸員)

日中平和友好条約45周年を記念して2023年9月に東京富士美術館で始まった特別展「世界遺産 大シルクロード展」が、3会場を経て岡山に巡回する。本展は中国の全面的な協力により、シルクロードの優品がこれまでにない規模で出品されている。

シルクロードはユーラシア大陸の東西にわたる交易路であり、文化交流の総体をも意味する。漢王朝が中央アジアを広く治めた紀元前2世紀頃、中国から地中海世界への交易が盛んになり、多くの人々が往来した。東西を結ぶ道には交通の難所が多く、迂回や中継のため複数のルートが存在する。15世紀頃まで多様な民族がこの道を利用し、文化や技術が往来した。19世紀末にドイツの地理学者リヒトホーフエンが一带で行われた絹織物の貿易に着目して「絹の道」という名を使用し、その後の歴史学者の研究や探検家の発掘を経て、より広範な地域での人や文物、文化の交流が明らかにされてきた。シルクロードの関連遺跡はこれまで登録されていた莫高窟や龍門石窟などに加え、東西の遺跡群が2014年に「長安―天山回廊の交易路網」の名で世界遺産に登録された。

日本へもシルクロードを通じて文物や文化が伝えられてきた。奈良時代(8世紀)の遺品を保管する正倉院には、中国盛唐をはじめとした大陸からの舶来品が含まれる。ここには西域の材料や技法、文様が認められ、当時の文化融合の様相を示す。また、仏教の伝播にもシルクロードは意義深い。インドから中国に伝わったルートのひとつであり、経典を求めて僧が旅した道でもあった。さらにシルクロードの各地では仏教に関する絵画や彫刻が生まれる。中国の伝統的な思想や造形芸術とあわせて新たな展開をもった仏教は、日本や他の国々に影響を与えた。このようにシルクロードと縁がある日本では、1980年前後より関連するテレビ番組や旅行が盛んになり、展覧会も複数開催されるなど注目が続いた。岡山でも関係地域の文物が出陳されてきた。

そのなかで本展の特徴は、中国の9省2自治区にわたる27か所の博物館や研究機関より、約200点もの文物が出品される点にある。これまでの大規模なシルクロード展は、敦煌や新疆など所蔵場所を限定した特集が多かった。本展は広い地域における最新の研究成果をもとに、国宝に相当する「一級文物」44点や日本初公開の文物を含む、非常に充実した内容となっている。

本展はシルクロードの文化交流に焦点をあて、「民族往来の舞台」、「東西文明の融合」、「仏教東漸の遙かな旅」といった三章で構成される。ここでは各章から1点ずつご紹介する。

《瑪瑙象嵌杯》(図1)は新疆ウイグル自治区西北辺のボマ古墓から出土した。高さ16.0cmの金製の杯で、赤色の瑪瑙が象嵌されている。同じ手法の金工品がユーラシア草原地帯で出土しており、一帯の流



図1: 一級文物《瑪瑙象嵌杯》  
5~7世紀/  
1997年新疆ウイグル自治区イリ州昭蘇県ボマ古墓出土/  
イリ州博物館

行を伝える。持ち手部分は虎の形で、毛並みが細かく彫り込まれている。動物をかたどった柄は黒海北岸地域の伝統に連なるとされ、西方の香り高い遺宝である。

《猷馬図》(図2)は唐の第2代皇帝、太宗の妃・韋貴妃(597-665)の墓に描かれていた壁画。墓誌銘に埋葬時期が記される。馬の動きをおさえる二人の男性は「深目高鼻」と呼ばれる顔貌や特徴的な衣類から、西方出身の騎馬遊牧民と考えられている。唐王朝の礎を築いた太宗の時代には、約150cm四方の画面いっばいに力強く描きあげる技量をもった絵描きがいたこと、多民族が都市に集ったことを伝える。

《菩薩坐像》(図3)は龍門石窟西山の南西に位置する遺跡で出土した、高さ86.5cmの石彫。自然な体勢や衣文表現、豪華な装飾品はインドのグプタ美術の流れを汲む。同時に、腰を極端にしぼったプロポーションをもち、写実性と理想的な表現とが見事に調和した造形。7世紀末から8世紀初頭頃の制作とされている。

なお、図3を伝える洛陽市と当館が所在する岡山市は、1981年に友好都市締結を行った。洛陽を訪ねた岡山出身者は奈良時代の遣唐使・吉備真備にはじまり、日中国交正常化に尽力した岡崎嘉平太らの縁もあって、交流が続いている。

ほかにも日本で観る機会の少ない文物が集結する。多様な民族が興亡したシルクロードでは各種文字の文献史料が出土した。本展では漢語へ翻訳された当初の状態を留める仏典や、中央アジアで広く用いられたソグド語の書簡、通行に関する文書などが展覧される。また、鮮やかな姿を保った染織品も多数出品される。乾燥地帯に所在したことで色彩や形がそのままに伝わった貴重な史料群は、技法や文様の変遷を示す。

本展は2014年の世界遺産認定後、中国国外で初めて行われる大規模な展覧会である。ここに述べたほかにも、金銀宝飾品、青銅器、ガラス、陶磁器、唐三彩、絵画など、文化交流の歴史を物語る遺宝が数多く陳列される。会場ではシルクロードの遺跡と風景をあわせて紹介し、会期中は中国伝統楽器・二胡の演奏会も予定している。シルクロードの旅をお楽しみいただきたい。

## 【主要参考文献】

- ・東京国立博物館/NHK・NHKプロモーション編『シルクロード 絹と黄金の道 日中国交正常化30周年記念特別展』(2002年)
- ・NHK/NHKプロモーション/産経新聞社編『新シルクロード展 幻の都楼蘭から永遠の都西安へ』(2005年)
- ・東京富士美術館編『世界遺産 大シルクロード展』(2023年)

## 【特別展】

「世界遺産 大シルクロード展」(会期:2024年9月16日~ 11月10日)



図2: 一級文物《猷馬図》  
唐・乾封元年(666)/  
1991年陝西省礼泉県韋貴妃墓出土/昭陵博物館



図3: 一級文物《菩薩坐像》  
唐・7~8世紀/  
2000年河南省洛陽市奉先寺遺跡出土/  
龍門石窟研究院

# Drawing Melodies 響き合う表現

福富 幸(副管理者)

2015年に好評を得て、2019年Part2を開催した「目の目 手の目 心の目」展は、見るだけではなく、触ったり、寝っ転がったり、話しかけたりしながら作品を鑑賞(体感)し、WSやイベントを通じて多角的に美術の面白さや美術館そのものの魅力に気づいてもらおうという企画であった。同展のギャラリーコンサートを契機に「Drawing Melodies 響き合う表現」を始め、若手音楽家を核に〈美術とともに楽しむミュージアムコンサート〉を基本に展示室やホール、屋内広場、中庭を舞台に朗読やパフォーマンス等を行ってきた。コロナ禍で収録のみとなったプログラムもあるが、関係者の協力を得て今年度で5年目を迎える。オリジナル曲を創作し各界で活躍するピアニスト当真伊都子氏が魅力的な言葉で本事業のコンセプトをまとめてくれている。

## Drawing Melodies 響き合う表現

絵画を描くこと／音楽を奏でること／言葉を紡ぐこと／身体を揺らすこと 色をみること／音をきくこと／形をよむこと／人を見ること まるで思慮深い友だちのように、／美はいつも私たちに寄り添ってくれます。 美術館は、／ここにある美を大切に育んできました。／普段は静かな表現が多い美術館ですが、／この日は音楽や朗読や舞踊なども披露します。 まるで大きな森に包み込まれた時のように、／垣根を超えて響き合う、表現者たちによる美のアンサンブルにただただ浸ってみて下さい。 新しい自分は、貴方の中にいるのかもしれませんが。／少し視点を変えてみれば、貴方の日常に豊かな発見をもたらすことでしょう。

美術に限らず様々な文化事業は、団塊の世代を中心とする既存のファン層が減少していく将来を見据え、次世代へいかにアプローチしていくかが喫緊の課題となり、我々も美術館という固有の場所で何ができるか、模索を続けている。願わくば、何事にもチャレンジングでクリエイティブであれ、と思う。初年度より参画する県立城東高校では、先輩たちの活動が次の学年の何をするかのモチベーションとなり、当初演奏するだけでいっぱいだったところから、学生自身による選曲、作曲や朗読劇の創作まで学年ごとに工夫したプログラムを発表してくれている。また昨年度庭園づくりに取り組んだ県立興陽高校では卒業生が集い、難しい石組みの指導にあたり一緒に汗を流してくれた。音楽家たちも一般のコンサートでは演奏される機会のない楽曲やオリジナル曲を披露してくれる。彼らとともに時々の展覧会や作品と出会うことで、美術館が刺激的で楽しい発見と創造の場であり続けたいと思う。

2024年度は「大シルクロード展」によせて、10月12日、26日、11月2日に実施予定

開催年と出演者
2020年「岡山の美術」展によせて 上月真子(オーボエ)、岡山城東高等学校管弦楽部 ----- 次松大助(ピアノ) ----- 西室伸也(サクソフォーン)、都カルテット: 細川由佳(アルトサクソフォーン)、水川史織(テナーサクソフォーン)、今田学(バリトンサクソフォーン) ----- トウヤマタケオ(ピアノ)、当真伊都子(ピアノ、ボーカル)
2021年「柚木家三代展」、「草間喆雄展」によせて 渡邊めぐみ(ファシリテーター)、岡山県立城東高校音楽学類、岡山大学演劇部有志(朗読) ----- 西室伸也&都カルテット 上月真子、西室伸也、田中郁也(バイオリン)、大道真弓(ビオラ)、山口里美(チェロ)、当真伊都子、トークセッション:草間喆雄&小野耕石 ----- 岩本象一(サウンドパフォーマンス) ----- 平井優子(ダンスパフォーマンス)、当真伊都子 トウヤマタケオ
2022年「岡山の美術」展 浦上玉堂、内田百閒によせて 福島節と渚 ----- 西室伸也&都カルテット ----- 岩本象一 ----- 曾我大穂(仕立て屋のサーカス) ----- 渡邊めぐみ、岡山県立城東高校管弦楽部
2023年「ウイリアム・モリス展」によせて 加藤雄一郎(サククス)、学校法人就実学園就実高等学校生徒部(生け花パフォーマンス) ----- 当真伊都子、岡山県立操山高等学校有志(朗読) 岡山県立岡山城東高校管弦楽部 ----- 岡山県立興陽高校造園デザイン科庭園施工管理類型

助成:福武教育文化振興財団

協力:株式会社サウンド・スケッチ

アーカイブ映像はYouTubeにて公開

<https://www.youtube.com/channel/UCWUUb4>

XDLN2eGET\_2P0Jxj-Q

# 音の藤原和通

洪 性孝(学芸員)

芸術において「音」が関わる時、それを「サウンド・アート」と呼ぶことに違和感を覚える人は、今日においてはあまり多くないだろう。しかしこの言葉が広く用いられるようになるのは1980年代頃からであり、さらに一口にサウンド・アートと言っても、その中で音が果たしている役割は作品によって大きく異なっている\*。

今秋の当館では、音を扱ったアーティスト・藤原和通(1944-2020)を紹介する特別展示を開催する。岡山県倉敷市出身の藤原は、倉敷青陵高校を卒業後、上京し、1963年から作曲家・石井歓に師事し音楽家を志すが、自身の求めていた表現との不一致か、その道を投げ捨て67年ごろから奥吉野の山中に籠る。2年間ほど樵として生活を送りその後再び上京すると、巨大な石臼のような楽器「音具」を複数人で擦る、「音の出ないコンサート」の発表を行う(図1)。《音響標定(ECHO LOCATION)》と名付けられたこのパフォーマンスは、次第に規模を大きくし、76年にはヴェネツィア・ビエンナーレから招待を受けるも、制作発注先のトラブルによって実現には至らなかった。

その後藤原は88年までイタリアで生活し、帰国後はウォークマンとの出会いから音響技術に興味を向けるようになる。非常に優れた音の定位表現を可能にするダミーヘッド・マイクや、簡単に持ち運びのできるバイノーラル・マイク、音を振動へと変換するコミュニケーターなど、音を扱うためのさまざまな機器の開発を行った。ダミーヘッド・マイクを携えた藤原は世界中を周って様々な音を蒐集し、それらの音は92年から94年まで放送された子供向けテレビ番組「ウゴウゴルーガ」や、自身がプロデュースし2003年に京都で開店した音の専門店「オトキノコ」などで公開された(図2)。

冒頭で触れたように、今日において音が関わる芸術を「サウンド・アート」と分類するのならば、例えば《音響標定》などはその要素を含んでいるだろう。一方で個々の仕事をそれぞれ切り離して見ると、音とは無関係にも思える作品や、「アート」からは距離を置いたようなものも数多く存在する。

しかし上述のように、藤原の仕事を振り返ると、活動の幅を上げながらもその根底には常に、いかにして「音」そのものの存在を知覚するかを探る意識があることが見て取れる。藤原の中を貫くテーマに「音」があるのならば、その仕事を通観することによって、音という現象の在り方を拡張することもまた、可能なのではないだろうか。

\*: サウンド・アート研究については、主に中川克志『サウンド・アートとは何か 音と耳に関わる現代アートの四つの系譜』(ナカニシヤ出版、2023年)を参照。この中で中川はサウンド・アートを便宜的に4つの系譜に整理し、それぞれ〈音のある美術〉、〈音楽を拡大する音響藝術〉、〈聴覚性に応答する芸術〉、〈サウンド・インスタレーション〉としている。

【岡山の美術 特別展示】「藤原和通—そこにある音」(会期:2024年9月21日～11月10日)



図1: 安齋重男《1970年代美術記録写真集「藤原和通 1974年 渋谷」》1974年 東京都現代美術館蔵 ©Estate of Shigeo Anzai, courtesy of Zeit-Foto



図2: オトキノコ店内の様子 2003年撮影(現在は閉店)

# 岡山カルチャーゾーン ミュージアムの使い方「あいうえお」

岡本 裕子(主任学芸員)

2023年度、「岡山カルチャーゾーンミュージアムの使い方『あいうえお』」を、岡山カルチャーゾーン(以下、「カルチャーゾーン」)内の5つのミュージアム(岡山県立博物館、岡山市立オリент美術館、林原美術館、夢二郷土美術館、当館)で制作しました(図1)\*1。

以前より、多くの小中学生が、班別自主活動としてカルチャーゾーンを活用されています。また、ここ数年、特別支援学校や放課後等デイサービスなどの活用数も増加傾向にあります。しかし、ミュージアム側から小中学校の班別自主活動に対して、また特別支援学校や放課後等デイサービスに対して積極的なアプローチができていない現状があります。カルチャーゾーン内の5つのミュージアムは、「利用者」にフォーカスしてミュージアム活動を考えていきたいという共通の想いがあり、お互いに顔がみえる関係性もできていました。そこで、主に、学校、そして、地域や社会に生きづらさを抱えている方が、主体的にミュージアムを活用することができるよう「カルチャーゾーン・ミュージアムラーニング・プロジェクト」を立ち上げました。

その最初の取り組みが、「ミュージアムの使い方『あいうえお』」です(各館のHPにアップ)\*2。これは、神経発達症の方をはじめ、ミュージアムをはじめて訪問する方、利用に不安を感じる方など、どなたでもミュージアムを楽しみながら過ごすことができるように、当事者や関係者、医療関係の専門家の協力を得ながら制作しました。

現在、学校現場等で活用されはじめています。当館では、放課後等デイサービスが来館時に活用されたり、特別支援学校中学部3年生が美術館学習の事前学習で、また、小学校4年生の総合的な学習の時間「私もインクルーシブ社会の一員に」で活用されたりしています(図2・3)。そして、アナリティクスを今年度5月に導入して、アクセス回数(表示回数)、ユーザー数、ダウンロード数を一か月ごと追跡調査ができるようにしています\*3。また、5館の活用状況については、先月(2024年7月)県内関係諸機関663か所にアンケートを送付して追跡調査をしています。アンケート等の調査結果をみながら、利用者の困りごとを検証し今後の取り組みに活かしていきたいと考えています。



図1



図2



図3

\*1: 令和5年度 文化庁 Innovate MUSEUM 事業

\*2: 以下の二次元バーコードから、各館の『ミュージアムの使い方『あいうえお』』をご覧ください。



岡山県立美術館



岡山市立  
オリент美術館



岡山県立博物館



林原美術館



夢二郷土美術館

\*3: Google アナリティクス解析結果

データ収集期間		
表示回数	アクセス ユーザー数	データダウン ロード回数
2024年5月23日～6月23日		
272	201	103
2024年6月24日～7月31日		
303	258	91

## 展覧会スケジュール

**9月**  
September

7月9日|火| - 9月1日|日|  
**【特別展】**  
鈴木敏夫とジブリ展

9月4日|水| - 9月15日|日|  
**第75回 岡山県美術展覧会**

9月16日|月・祝| - 11月10日|日|  
**【特別展】**  
世界遺産 大シルクロード展

9月21日|土| - 11月10日|日|  
**【岡山の美術展】**  
藤原和通ーそこにある音

**10月**  
October

9月21日|土| - 11月10日|日|  
**【岡山の美術展】**  
藤原和通ーそこにある音

**11月**  
November

11月21日|木| - 12月8日|日|  
**【特別展】**  
第71回 日本伝統工芸展 岡山展

11月21日|木| - 12月22日|日|  
**【岡山の美術展】**  
第14回 I氏賞受賞作家展  
日原聖子・山田彩加・加瀬野裕介・花房紗也香  
**【岡山の美術展】**  
もっと伝統工芸(漆芸)

\*最新情報は岡山県立美術館ホームページをご確認ください。  
<https://okayama-kenbi.info>

9月16日|月・祝| 13:30- / 14:30-  
**演奏会 「中国伝統楽器 二胡で奏でるシルクロードの旅」**  
演奏 松林泉氏(二胡演奏者)  
会場 地下1階屋内広場 ※参加無料

9月21日|土| 14:00-15:30  
**記念座談会 「オトの藤原さん」**  
出演 新江和美氏(藤原和通アシスタント)、  
栗津ケン氏(AWAZU HOUSE主宰アート・プロデューサー)  
司会 軸原ヨウスケ氏(COCHAE)  
会場 地下1階展示室 ※要観覧券

9月28日|土| 18:00-  
**美術の夕べ 「大シルクロード展をみる」**  
講師 森田詩織(当館学芸員)  
会場 2階展示室 ※要観覧券

10月14日|月・祝| 14:00-  
**演奏会 「中国伝統楽器 二胡で奏でるシルクロードの旅」**  
演奏 松林泉氏、森上祐子氏(ピアノ演奏)  
会場 2階ホール(当日先着200名) ※要観覧券

収蔵品の紹介  
Vol. 17

兼行誠吾(象)  
平成29(2017)年  
陶器・手びねり  
23×41×36cm



象の身体を彩る深く滲んだような青色と、背に乗せられた壺の古器物にも似た質感に注目したい。その趣ある色彩や表情は、釉薬の配合による焼成時の化学変化によって生み出されたものである。作者の兼行誠吾は、1979年岡山県岡山市生まれ。釉薬の新たな可能性を求め、「蛭手」の伝統技法を斬新に転換した《光の帯》で、2017年に第10回「I氏賞」大賞を受賞している。(古川)

### 展覧会をいくつか

守安 収

只今「鈴木敏夫とジブリ展」開催中。鑑賞環境を守るためには毎日の上限入館者数コントロールが鍵になると、みんなで入念に準備してきました。嬉しい悲鳴が上がる日々が続き、7月は何とか凌ぎましたが、8月は？と不安は拭い切れません。そこで最終日には合格通知が届きますようにとお祈りし、会場内の銭婆の開運みくじを引いたところ、「末吉」が出ました。うまくいくような気がします。もう一つの湯婆婆は恋愛みくじなので、遠慮しました。▼ジブリの前が「北斎と広重展」。一度に二人の富嶽三十六景が見えるということで、これも大盛況でした。ありがたいことです。担当学芸員の熱意が伝わる展示構成でしたが、本人からはこうすればもっと良かったとの反省の弁が出るなど、館にとっても担当者にとっても有意義な展覧会になりました。▼先日は大阪市立自然史博物館の「猫展」へ。私は「猫」より「犬」派なのですが、観覧後は、猫類に関する知識が爆上がりしたので、にわか「猫博士ちゃん」になった気分です。他にも、かつて生物の授業で勉強した遺伝の優性と劣性という用語が、顕性と劣性に代わっていることなどを知りました。正確な事実や情報を伝えてくれる博物館は年齢に関係なく学ぶにはもってこいの場所です。みんな博物館へ行こう!! 帰り道の長居競技場では中学生の陸上大会。熱波と大歓声の中、ランナーが周回する姿にはただただ恐れ入りました。▼大阪中之島美術館へも寄って「醍醐寺国宝展」。順路を進むと、宗達の《舞楽図屏風》と《調馬図屏風》が並んでいました。開館三周年記念「桃山展」で拝借した作品です。以来、何度か拝見する機会がありましたが、その度ごとに借用にあたって仲介の労を取ってくださった宝塚清荒神清澄寺の故坂本光聰大和上の温顔が浮かんできます。30余年前のことながら感謝しかありません。たくさんの方々に支えられて県美は永らえています。



〒700-0814 岡山市北区天神町8-48  
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648  
Email kenbi@pref.okayama.lg.jp  
<https://okayama-kenbi.info>

交通案内 JR岡山駅後楽園口(東口)から  
・徒歩15分  
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩3分  
・宇野バス 四御神、瀬戸駅、片上方面「表町入口」下車徒歩3分  
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ  
・循環バスめぐりん 益野線「表町入口」下車徒歩3分

開館時間 9:00—17:00 (入館は16:30まで)  
夜間開館日は19:00まで(入館は18:30まで)

休館日 月曜日(休日の場合その翌日)／年末年始／展示替え期間中

### 編集後記

中西ひかる

本誌の表紙を飾った涼しげな色合いが目をはひく兼行誠吾の《象》。実は、3年前に発刊した館ニュース135号の『新収蔵品紹介』でも、同作家の別作品について取り上げています。バックナンバーでは、「螢手」の技法を転換し制作した白磁の作品・《光の帯 Collapse》について掲載しておりますので、気になった方はぜひこちらもあわせてお楽しみください。今までに刊行した館ニュースは、美術館ホームページからもご覧いただけるようになっておりますので、これから訪れる「読書の秋」にもご活用いただけたらと思います。